関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[特別寄稿] 欧米における日本語教育と日本研究

著者	D. E. ミルズ
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	7
ページ	31-40
発行年	1974-03-30
その他のタイトル	Japanese Studies in Europe and America
URL	http://hdl.handle.net/10112/16097

特別寄稿

欧米における日本語教育と日本研究

ケンブリッジ大学　D・E・ミルズ

現在ヨーロッパ諸国とアメリカで行われている日本語教育、日本研究についての話――という注文でございます。私はどのくらいみなさんに役に立つような話ができるかあまり自信を持っていませんが一つやってみましょう。

今年までは「英国」と「ヨーロッパ諸国」と別々に言わなければならなかったのでしょうが、ご存知の通り英国はやっとのことでヨーロッパの共同市場に入れてもらってヨーロッパの共同体の一員となりましたから、これからは別々に考えてはいけなくなりました。学界でももうなるべく親密な関係を作ろうという努力がなされています。というのは、今年の四月始めごろにオックスフォードでCONFERENCE ON MODERN JAPAN すなわち現代日本の文化、社会、経済、歴史をテーマとする会議が催されたのです。その会議はロンドン・シェフィールド・オックスフォードとケンブリッジの四大学が協力して主催したもので、ヨーロッパの色々な国から現代日本研究の専門家が呼ばれて参加しました。私の専門は中世文学ですが、ケンブリッジの代表として文学部門の組織を担当していましたが、三月に日本に来て残念ながら会議そのものに出席することはできませんでした。友達からの手紙によりますと、会議は大成功でした。又日本語日本文学の方面で将来の協力を図るための委員会が出来たそうで、誠によろこばしいことだと思います。実は、今までは協力――といわないまでも、連絡ですら非常に少かったのです。あったとしますと、それは個人と個人との間の、全く組織のない偶然なことだったのです。ヨーロッパ諸国の日本研究家はたがいに接触する機会がほとんどありませんでした、又たがいの国の教育制度もあまり知りあっていませんでした。私の今日の話をお聞きになったら分ることだろうと思いますが、ヨーロッパではある程度まで学問の伝統は共通していますが、「ヨーロッパの教育制度」といえるようなものはありません。多かれ少かれたがいに違っている制度が沢山あるといった方が適当です。

又英米のいわゆるANGLO-SAXONの国に目を向けても同じようなことがいえると思います。共通語を持ってはいますが、国と

しては似ている点より違っている所が多いのではないかと思います。特に教育制度がかなり違います。実は、どちらかといいますと、英国のより日本の教育制度の方がアメリカの制度にずっと近いのです。

去年この話を頼まれたら私は大変困ったと思いますが、先程お話しましたその会議のおかげでヨーロッパ諸国での日本語の教え方、日本研究の現状についても資料をかなり沢山手に入れることが出来ました。アメリカの場合には、自分は英国人でありながら五年間アメリカのカリフォルニヤ大学で日本語と日本文学を教えたことがありますから、直接の経験を利用してお話をすることができるのです。因みに、本題に入る前に私自身の履歴の簡単な説明をしたらいいかと思います。自己を中心にして話を進めたくは勿論ありませんが、自分のように戦争の関係で日本語を習って日本研究の分野に入った、いま中年にかかっている人はイギリスにはありますが特にアメリカでは多いです。イギリス以外のヨーロッパ諸国には勿論ありません。

私が初めて大学に入ったのは昭和十六年正月のことですが、ケンブリッジの GONVILLE AND CAIUS COLLEGE でフランス語とドイツ語を勉強しました。ついでに言いたいことですが、日本語を専攻する前にこのような極く普通の科目で学位を取ったということは今から考えると特にいいことだったと思います。ヨーロッパ文学の知識を広めたという意味でもいいですし、実用的な面から見てもあとで大変役に立ったことです。なぜかといいますと、外人の日本研究家は、英米の人それからフランス人とドイツ人が大多数だからです。日本研究のためにはロシヤ語やイタリア語やスペイン語が読めなくても別に困ることはありませんが、英仏独の三ケ国語はまずなくてはならないといってもいいくらいです。

昭和十七年に召集されて軍隊に入った時はもう太平洋戦争が始まっていたころです。軍隊に入る前、日本語をやったらどうかといわれていまして、入隊してから三・四ケ月たって大学で、軍人のための日本語コースに入りました。その当時は日本語の出来る人はアメリカと違ってイギリスにはあまり多くありませんでした。その結果、卒業してから私は東洋へ派遣されないで、軍人でありながらロンドン大学へ通って軍人に日本語を教えることになりました。当局がその当時は日本語はあまりに難しすぎると思っていましたから、漢字を習って読むことか、ローマ字で話すことか、どちらか一つだけをやることになっていましたが、後でそれではだめだ、両方しなければ本当に日本語をマスターすることができないということが当局に分かってきて、制度が変わりました。読む方だけやりますと、活きたことばというよりむしろ暗号みたいに日本語を理解しようとすることになります。ローマ字だけを使って会話を教えることはできるにはできますが、話はごく程度の低い、日常的なことに限られてしまいます。日本語の一面を見反面を無視することは本当に無意味なことだったといわなければなりません。

先程いいましたように、私はロンドン大学に残りまして、昭和二十二年に除隊になる時までいました。そのうち自分で一生懸命に勉

強して日本語の知識を広めて日本の文化・文学も勉強しましたから除隊の時までにロンドン大学の日本語の学位を取ることができました。到頭軍服を捨てることができたのは昭和二十二年で、同じ年にはロンドン大学の LECTURER に任命されました。

この昭和二十二年という年は英国の東洋研究にとって画期的な年だったといえます。といいますのは、英国が戦争の時には東洋語特に日本語教育が大変後れていたということを痛感したのです。戦争以前は日本語を教えている所はというと、ロンドン大学だけでした、又そうはいっても、ロンドンにもLECTURERが一人だけいる程度でした。東洋文化東洋語の教育と研究のことを調査した委員会の勧告によって、昭和二十二年から英国政府が相当な金額を出して東洋語東洋文化の研究を支持して養成することになりました。ロンドンでは日本語の先生の数が始めは五人、それから六人、七人にも増えました。日本史も教えられるようになりました。同じ昭和二十二年にはケンブリッジでも日本語科が設立されました。東洋のことを専門に勉強している学生のための奨学金を出す制度もできましたし、図書館にも日本関係の本を買うためのお金もわりあてられました。それで昭和二十二年からはロンドンとケンブリッジとの二ケ所で日本研究が盛んになったわけです。オックスフォードの日本語科というのは始めのうちは中国語を勉強している学生のための、副次的なものでしたが、今から十年ぐらい前から単独な日本語コースができました。

今いいましたように、昭和二十二年から政府が採用したいわゆる SCARBROUGH COMMISSION の勧告の目的は広い意味の東洋学、いろんな方面の東洋学を養成することにありました。いうまでもなくその時の主要な年輩の学者は多くは伝統的な研究のしかた、研究の対象に重きを置いていました。現代日本の研究は、無視されてはいませんでしたが、とくに強調されたわけでもありません。社会学、経済学というより、文学と歴史の研究が奨励されました。

五十年代の終りごろに SCARBROUGH COMMISSION の勧告によってあげた成果を新しい調査委員会が調べて新しい方針を勧告した時から、その傾向は一変しました。SIR WILLIAM HAYTER を会長としたこの委員会の勧告によって、その時までのように伝統的な研究に重きを置かないで、むしろ現代の研究、とくに社会学、経済学のような実用的な学科を支持するための資金が出ました。これはどうもだれにでも納得できるような勧告ではなくて、かなり激しい論争が起こりましたが、到頭政府がその HAYTER REPORT を採用して数ケ所で新しい研究センターを置きました。日本研究のためのセンターはシェフィールド大学の傘下で設立されまして、いまでは日本語を習っている学生が一番多い所です。ただ他の日本語科と違う点は、学生は①日本語を単独な学科として習うのではなくて、経済、社会学などと一緒にやる、それから②現代以前の日本語、日本文学はやらない、ということです。

イギリスでは、大学でないと日本語の勉強ができる所は殆んどあ

りません。私の知っている限りでは、一ケ所だけあると思います—ロンドンのある夜学校です。日本語科のある大学の中で一番入りやすいのはロンドンとシェフィールドです。ケンブリッジ大学は二十五ぐらいのほとんど独立な COLLEGE から成っていて、だれを COLLEGE に入れるか、日本語を習いたい学生を何人いれるかということを決めるのは日本語科の先生たちではなくて、一つ一つの COLLEGE の当局です。もう一つ私たちがケンブリッジである程度まで束縛されているのはコースの長さです。ケンブリッジに昔からあったパターンではコースが三年で、四年にするのはいろんな理由からなかなか容易なことではありません。シェフィールドでは勿論四年ですー学生が二つの科目を取っていますから。ロンドンではもと三年だったコースを四年にしたのはもう十二・三年前のことですが、この四年のコースは今でも他の学科の先生たちにあまり歓迎されていないようです。

シェフィールドでなされていることは勿論特別です。ロンドンとケンブリッジとは大体コースの内容が同じようなもので、イギリスの伝統的なパターンに従っています。すなわち試験の内容は (a)指定文献からの翻訳（現代文もあって古典文語のものもあります、又古典は古代から明治までのものです） (b) UNSEEN TRANSLATION すなわち未見の、下調べのしてない文からの和英の翻訳 (c)英和の翻訳と自由作文 (d)歴史、文学史 です。ロンドンでもケンブリッジでもこの ESSAY PAPER の一つの代りに一種の簡単な論文を出してもいいことになっています。筆記試験のほかに勿論口頭試験すなわち会話の試験もあります。

国によって学位の名称が違うことは周知のことですが、イギリスでは大学によっても必らずしも一様ではありません。たとえばスコットランドで取る始めの学位は M.A. といってもイギリスの B.A. にあたるものです。ロンドンなどでは M.A. は B.A. を取ってから研究を続け試験を受けて取る学位です。しかしオックスフォードとケンブリッジとでは B.A. を取ってから三年待って又お金を出して申し込むと M.A. が取れます。M.A. を取って初めて大学の SENIOR MEMBER になると見られています。ケンブリッジで一つ変なことは、ケンブリッジとオックスフォード以外の学位が認められていないことです。それで大学で出版している CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER という新聞のような公報のなかに出てくる、たとえば東洋学部の先生のリストを見ると先ず DOCTOR の少いことが驚かれるでしょう。しかし実は先生の半分以上が Ph. D. を取った人です。ただ、ケンブリッジの Ph. D. ではなくて、ケンブリッジ以外の大学の Ph. D. ですから、CAMBRIDGE UNIVERSITY REPORTER には書かないことになっています。他の大学で D. Litt. という、Ph. D. よりずっと程度の高い学位を持っている、サンスクリットの教授の BROUGH 先生のような偉い方の名前の所を見ても、やっぱり M.A. と記されているだけです。このような伝統はなかなか変えにくいです。実は Ph. D. とい

う学位はケンブリッジではそう古くからあるものではありません。昔は DOCTOR というと、D. Litt. のことでしたが、それは Ph. D. のように論文を書いてもらう学位ではなくて むしろ日本の旧制度の文学博士のようなもので、年輩の、又相当業績のある人でないともらえないものでした。

ケンブリッジで Ph. D. が少い方だとしますと、アメリカはその正反対です。Ph. D. がなければ正式の先生になることが出来ない程です。Ph. D. の話が出ましたから、そのあたりからアメリカの制度とイギリスのそれとの比較に入ることにしましょう。イギリスでは B. A. を取ってから、また三年間研究して論文を書いて Ph. D. になることが普通です。別に講義に出て単位を取る必要はありません。(因みに、イギリスはそもそも始めから単位制度はありません。)しかしアメリカでは論文のための研究を始める前に、ほかの要求があります。講義にでて単位を取らなければなりません。又もう一つ論文を書く前に横たわっている大きな障害物とでもいえるもの、すなわり QUALIFYING ORAL EXAMINATION があります。この口頭試験は三時間もかかるのが普通で、五つもの方面(たとえば日本語科なら日本の文学、歴史、美術、国語史など)で試験されるわけなのです。その試験に合格してはじめて Ph. D. CANDIDATE となって論文を書いてもいいことになります。どうしてそうなっているかといいますと、アメリカの Ph. D. コースはイギリスのと少し目的が違うからです。深い研究に専心しないで、後で大学の先生になったら役に立つようなもっと一般的なことをさせようとするのが目的ですから、ヨーロッパ程には論文に重点が置かれているわけではありません。ロンドンやケンブリッジと違って、半分まで、いや半分以上も原作品の翻訳からなっている論文を書いてもいいことになっています。ケンブリッジでは翻訳というより、オリジナルな研究が一番大事です。現代文学についての論文の場合には翻訳は全然 Ph. D. を取る資格としては認められません。

初期の海外日本研究の先駆者は一番主だった人たちが英国人だったのに、第二次世界大戦直前には先程いいましたようにイギリスでは日本研究が大分下火になっていてほとんどなされていなかったといってもいいくらいでした。その代りアメリカでは割合に強く根を張っていたと思います。それでも一番めざましい発展をさせたのは太平洋戦争です。戦後の時からいろいろな大学では日本語科のスタッフを段々殖やして来ましたが、また日本語を習いたい学生の数もずっと殖えました。特に十五年ぐらい前に NATIONAL DEFENCE EDUCATION ACT が可決になった時から政府からの援助が出て大体昭和四十四年までは日本研究は非常に盛んでした。しかしこのところ政府からの援助の規模が小さくなりましたし、一般の経済危機で大学そのものも倹約しなければならなくなりましたから、アメリカでも日本研究には少し疑問符が付けられるようになりました。五・六年前まではいろいろな小さい大学でも日本語科を置く傾向がありましたがそれはもう逆コースになったのではないかと

思います。これから卒業する人は就職には非常に困ると思います。

米国の主要な日本語科は次の大学にあります（ＡＢＣ順）――カリフォルニヤ（バークリー）・シカゴ・コロンビヤ・ハワイ・ハーバード・ミシガン・ペンシルベーニヤ・プリンストン・スタンフォード・ワシントン（シヤトル）・エール。

アメリカの学生は B.A. を取るのに四年かかるのが普通ですが、初めの二年は日本の教養学部にあたるもので MAJOR は三年生になって初めて決めることになっています。アメリカの A.B. という学位はアメリカ人にいわせても程度のあまり高くないものとなって来ましたが、日本語科の A.B. についても大抵同じことがいえると思います。たとえば M.A. コースに入るまでは古典文語も習わないような所もある程です。この点でケンブリッジとは大分違います。ケンブリッジの学生は三年間集中的に日本語だけやりますが、よくできる人ならアメリカの M.A. からあまり遠からぬ程度に達することができます。アメリカでは M.A. といっても A.B. を取ってから一年で取れるのもあります（たとえばハーバードの EAST ASIAN STUDIES）。

私の教えていたバークリーの日本語科では一年生は JAPANESE MAJOR でない人が大部分でした。しかし二年生、特に三年生になるとほとんどが JAPANESE MAJOR でしたがその熱心さと勤勉さには驚きました。大学院の学生になるとなおのことです。その点ではアメリカの学生に感心しました。

これからヨーロッパについてのことにかかりますが、その話に入る前にちょっと付け加えたいことがあります。その一つは、ある高等学校の科目に日本語が入っていることです。教えている所はまだ非常に少いといわなければなりませんが少しずつ殖えて行くだろうと思います。もう一つはカナダのことです。カナダの教育制度のことはあまりよく知りませんが大学のパターンは英国のよりもむしろアメリカのパターンに似ている点が多いのではないかと思います。カナダにも勝れた日本研究のセンターがありまして、西の方の UNIVERSITY OF BRITISH COLUMBIA とトロント大学です。

今度はヨーロッパに目を向けまして、またＡＢＣ順で参りましょう。そうすると一番先にくるのはオーストリヤです。WIEN 大学に INSTITUT FÜR JAPANOLOGIE があって、かなり栄えているようです。マスターを取るには四年いりまして Ph. D. を取るにはまたそのあと二年いるのです。WIEN のほかに GRAZ という大学でも日本語を教えることがあるそうですが、あまり発達していないようです。

② デンマーク　コースについては委しいことは知りませんが、コペンハーゲン大学には日本語の教授職があって今在職の人はスエーデン人で私がバークリーにいた時に助手をした人です。

③ フランス　フランスの日本語授業の伝統は英国のよりもズット長いです。日本語を教えている主要な所は次の三ケ所です（はじめ

は五年前までの名前で出します)。(i)国立東洋語学校、学校そのものはルイXIV世まで遡るそうですが、日本語の席を置いたのは明治四十年でした。昭和四十三年以前は何の大学にも付属していない、独立した学校でした。(ii)パリ大学文学人文科学部日本語科、これは第一次世界大戦後日本政府の要請で置いた日本語科です。(iii)国立高等研究院、これも何の大学にも付属していない研究院です。日本関係の授業は昭和二十四年から始まりましたが、日本だけをテーマとする講義が始まったのは昭和四十年からです。ご存知だろうと思いますが昭和四十三年の激しい大学紛争の結果、フランスの大学の組織には相当大規模な改革が行われて、パリ大学は分解されていろいろの新しい大学が設立されました。むかし独立だった国立東洋語学校はいわゆるパリ第三大学の傘下に入りまして、今は国立東洋文化研究所と改名されました。それでも、学校の使命には変りがありません、すなわち通訳商用など実地の職業への応用に資するのが本来の使命です。コースは昔は三年だったのが今は二年になりました。前に日本関係の講義を担当した RENÉ SIEFFERT という方はいま研究所全体の所長となりました。昭和四十三年以前にパリ大学の日本語科だったのはいまはパリ第七大学の中の東アジア研修部門の一部分です。講義は学校のスタッフの人だけではなくて、よそから(たとえば国立高等研究院から)くる先生もすることになっています。普通の学士か修士になるためのコースもありますが、この学校は本来は学者を養成するためのものです。国立高等研究院の中の人文科学部門は第四史学文献学部門、第五宗教学部門、第六経済社会学部門の三つですが、三つともある程度まで日本関係の講義がなされています。文学国語史関係の授業は勿論第四の史学文献学部門ですることになっています。この研究院は試験がなく自由聴講の制度があるというのが特徴です。

先程講義ということばを使いましたが実は本当の講義といえるようなものはなくて演習の形で授業がなされているのです。

パリのほかにもう一つ LYON 第二大学にも日本語科がありますが、まだあまり盛大にはなっていなくて、授業時間は割合に限られているようです。

最後にフランスで注目すべきこととしてあげたいのは、小規模のものではありますが「日本ブーム」といってもいいくらい学校で日本のことに興味を持っている学生の数が多くなったそうです。パリで二ケ所の高等学校でも日本語を教えるようになりました、又ある私立学校でも、成人のための夜学校でも日本語を教えている所が数ケ所あるようです。

④ ドイツ　東ドイツについては全然資料を持っていないのは残念です。西ドイツについてでもあまり詳細な資料は持っていませんが日本語を教えている大学が十二ケ所あるということだけは確かです。又教授の席がない所ではごく初歩的な程度の現代語を教えているに過ぎません。一番注目すべきことは会議の時に LEWIN 先生が出された報告によると、日本語を話す方よりも読む方に重きが置かれ

ているということです。

⑤ イスラエル　イスラエルでも初めはなるべく学生に会話の練習をさせたようですが、学生は教室を出ると日本語を使う機会がなくなるから満足できる程度の会話の力を養成するのは到底不可能だと諦めて今は読む方に重きを置くようになったそうです。

⑥ イタリア　日本関係の講義は七ケ所の大学でなされているようですが日本語を教えているのは四ケ所だけです。

⑦ スェーデン　スェーデンでストックホルムでもウップサラーでもUNDERGRADUATEのためのコースがありますが大学院のコースがあるのはストックホルムだけです。UNDERGRADUATEの方のコースは二年で、GRADUATE は四年だそうです。

⑧ スイス　日本語科のある大学はチューリッヒだけです。コースは二年ものが三つあって、その六年をすました学生は大体アメリカの M. A. の程度に達しているそうです。

⑨ オランダ　ライデン（LEIDEN）大学に日本語科がありますがコースについての資料を欠いています。

最後に研究者の表をかかげておきます。

（筆者・ケンブリッジ大学東洋学院日本文学科助教授）

英米仏独の日本研究家リスト（大学別）

（原則として文学語学関係に限る。但し英の場合は歴史関係も含む。
仏独の場合は手持の資料による。）

イ　ギ　リ　ス

ケンブリッジ大学

(Miss) C. E. BLACKER	民間信仰；福沢諭吉
D. E. MILLS	中世文学，特に説話文学；曽我兄弟関係の文学
C. D. SHELDON	江戸時代の経済史

ロンドン大学

H. CLARKE	方　言
C. J. DUNN	浄瑠璃，歌舞伎
P. G. O'NEILL	現代日本語教育；謡曲
K. L. C. STRONG	近代文学
W. G. BEASLEY R. L. SIMS	歴史（ともに近代）

オックスフォード大学

I. J. McMULLEN	熊沢蕃山，特に蕃山の源氏研究

B. POWELL　新　劇
G. R. STORRY　歴史（近代）

シェフィールド大学
G. BOWNAS　近代文学
J. F. MORAN　国語学，特にキリシタン関係
（以上のほか，サセクス（SUSSEX）大学に日本語科はないが INSTITUTE OF DEVELOPMENT STUDIES の FELLOW として R. P. DORE 氏がおられる）

フ　ラ　ン　ス

パリ第三大学（国立東洋文化研究所）
J. ORIGAS　漱　石
R. SIEFFERT　文学，特に竹取物語，謡曲，雨月物語

パリ第七大学（東アジア研修部門）
H. MAES　平賀源内
(Mlle.) J. PIGEOT　御伽草子

国立高等研究院（第四史学文献学部門）
B. FRANK　説話文学；片忌と片違

ド　イ　ツ

ボッフム大学
H. HAMMITZSCH　文化史；俳句，俳文
B. LEWIN　国語史，文法；

ハンブルグ大学
O. BENL　文学（古典および近代；特に翻訳が多い）
G. WENCK　国語学，特に音韻史

ミュンヘン大学
W. NAUMANN　歌論（特に連歌），俳論

ア　メ　リ　カ

カリフォルニア大学（バークリー）
H. AOKI　国語学
(Mrs) H. C. McCULLOUGH　軍記物語；栄華物語；伊勢物語
W. H. McCULLOUGH　中古，中世の文学と歴史；栄華物語
F. MOTOFUJI　歌舞伎；近代文学

シカゴ大学
資料を欠く

コロンビア大学
D. KEENE, I. MORRIS　文学（古典および近代）

ハワイ大学

J. ARAKI	幸若舞曲；江戸文学（黄表紙，洒落本；雨月物語）
V. VIGLIELMO	近代文学

ハーバード大学

E. A. CRANSTON	平安日記文学・物語（特に和泉式部日記）
H. HIBBETT	元禄および近代文学
D. H. SHIVELY	江戸文学と社会史

ミシガン大学

R. H. BROWER	和歌史，特に新古今時代
E. G. SEIDENSTICKER	文学（古典および近代）

ペンシルベーニヤ大学

E. DALE SAUNDERS	阿部公房；雨月物語；仏教史
(Mrs) B. RUCH	中世の語り物

プリンストン大学

(Mrs) K. BRAZELL	謡曲；とはずがたり
E. R. MINER（英文学科）	和歌史；日記文学

スタンフォード大学

M. UEDA	謡曲；芭蕉

ワシントン大学（シャトル）

R. N. McKINNON	演劇；近代文学
R. A. MILLER	国語史；特に系統論

エール大学

S. MARTIN	国語学
E. McCLELLAN	近代文学